

# 博士学位論文審査要旨

2009年11月12日

論文題目：古墳時代の遺跡学—ヤマト王権の支配構造と埴輪文化—

学位申請者：坂 靖

審査委員：

主 査：文学研究科 教授 松藤 和人

副 査：同志社大学歴史資料館 教授 辰巳 和弘

副 査：佛教大学文学部 教授 門田 誠一

要 旨：

本研究は、5～6世紀の古墳時代を対象に、古墳、集落、豪族居館などの遺跡と埴輪などの遺物を総合的かつ構造的に検討する「遺跡学」という視点から分析し、古墳時代像の見直しを試みたものである。伝統的な考古学は遺構もしくは遺物に偏った個別的研究が主流であったが、本研究ではヤマト王権の所在地で発掘された集落、豪族居館、古墳とその外表施設としての埴輪を総合的かつ構造的に分析し、各地に前方後円墳を築造した豪族（「王」と呼称）の政治的・社会的背景の解明を企図した挑戦的な研究である。また渡来系遺物・鍛冶生産者集団の分析を通じて豪族が競って朝鮮半島の先進文化・技術の摂取に努め、権力基盤を強化した実態を考古学資料から解明する。

本研究は2部構成を取る。第Ⅰ部では、申請者の研究フィールドである奈良盆地を基軸に、朝鮮半島までを視野に収めながら、古墳、集落、豪族居館などを分析し、政治的・社会的背景を探ったうえで、被葬者の多様な個性を反映する古墳と遺跡との関連について考察し、ヤマト王権の傘下にあった豪族の支配構造の実態究明を試みる。また第Ⅱ部では、ヤマト王権と日本固有の埴輪・木製立物を中心に考察し、それらの歴史的意義を考察する。

Ⅰ・Ⅱ部の各章では、古墳を築造した豪族の権力基盤、支配構造などを個別具体的に考察する一方、その配下にあった渡来系集団や鍛冶生産者集団の実態を検討した。その結果、脆弱な政治権力基盤しか持ち得なかった豪族 相互の抗争と個性が反映されていることを、埴輪や各種の遺構・遺物の詳細な分析から明らかにした。各章の研究では、従前の研究史を咀嚼し、最新の調査成果・データの集成と緻密な分析を通じて、従来にない古墳時代社会の構造的・多面的な歴史像を提示する。

ヤマト王権中枢部の大王居館、集落の実態については調査が及んでいないため不明な点を残すが、5世紀代にヤマト政権の一翼を担った雄族「葛城氏」の本貫地における調査成果を総合的に検討する中で、ヤマト政権傘下豪族による支配構造の実態解明に寄与した点は高く評価される。また「倭馬飼部」の本貫地と目されてきた佐保川流域の額田地域、「倭屯倉」の所在地に比定される「おおやまと（大倭）」地域の調査成果にもとづいた実証的な研究は、これまでの文献史学研究の欠を補うに余りある。

本論文は、社会構成単位概念・用法に十分咀嚼されていないところを残すとはいえ、ヤマト王権による支配構造の一端を実証的に解明する方向性を提示し、従来の古墳時代像に一大転換をはかる研究として高く評価される。

よって、本論文は、博士（文化史学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

## 学力確認結果の要旨

2009年11月12日

論文題目： 古墳時代の遺跡学-ヤマト王権の支配構造と埴輪文化-

学位申請者： 坂 靖

審査委員：

主 査： 文学研究科 教授 松藤 和人

副 査： 同志社大学歴史資料館 教授 辰巳 和弘

副 査： 佛教大学 教授 門田 誠一

要 旨：

上記審査委員3名は、2009年10月31日、15:00から約3時間にわたって、学位申請者に対して口頭試問をおこなった。

学位申請者は、提出論文に関して審査委員からの研究内容に関わるさまざまな質疑に的確に応答し、本論文の研究水準の高さと学術的価値を証明した。さらに申請者は語学（ハングル）においても十分な学力を有することが確認された。

以上のことから、本学位申請者の専門分野に関する学力ならびに語学力は十分なものであると認める。

# 博士學位論文要旨

論文題目：古墳時代の遺跡学—ヤマト王権の支配構造と埴輪文化—  
氏名：坂靖

## 要旨：

古墳時代は、考古学資料による時代区分であり、大阪府の大山古墳などの大型前方後円墳を中心に様々な墳形の古墳が築造された時代である。本論文は、この古墳時代を「遺跡学」に基づいて分析し、評価しようとするものである。

遺跡には、無限大の歴史情報が集積されている。遺跡を分析し、遺跡そのものの歴史的意義を究明する過程が「遺跡学」であり、考古学研究そして歴史学研究の王道であるといっても過言ではない。遺構と遺物から構成される遺跡が、発掘調査などの方法を通じて正確に意義づけられたとき、研究が進展し新たな地平が開かれる。

古墳時代の研究は、古くからおこなわれてきた。とりわけ、この時代を特徴づける遺跡である古墳そのものの研究は明治以降盛んにおこなわれ、多くの調査研究成果が得られてきた。その遺跡を構成する遺構（埋葬施設や外部施設など）・遺物（副葬品や埴輪など）の個別研究も数多い。一方、集落や豪族居館など古墳以外の遺跡の研究はそれに比べやや立ち遅れた感があったが、1981年の群馬県三ツ寺I遺跡の調査、1992年～2004年に及ぶ奈良県南郷遺跡群の調査など、近年の注目すべき成果がある。しかし、両者を総合化する目論見は数少なく、それらを総合化したとき、新たな古墳時代像がみえてくる。本論文は、奈良盆地を中心に発掘調査を続けてきた技師の立場から、古墳時代の古墳や集落、豪族居館などの遺跡と古墳に樹立された埴輪の歴史的意義について総合的に分析して、新たな見解を提示しようとするものである。

本論文の冒頭は、序論「問題の所在」で、上記の「遺跡学」とは何か、用語の問題、問題点の整理、全体の構成などについて触れ、続く本文は、II部構成とした。第I部は「遺跡学からみたヤマト王権の支配構造」、第II部は「ヤマト王権と埴輪文化」とし、それぞれを4章に大別し、章・節ごとに関連論考を集めた。

本文の第I部では、奈良盆地を中心に朝鮮半島までを視野に、古墳や集落、豪族居館などを分析し、古墳築造の政治的・社会的背景を探る。本論文では、全国各地に築かれた前方後円墳被葬者が「王」として君臨し、支配を貫徹していたという立場から「王権」という用語を使用する。古墳時代前期に奈良盆地東南部にあった強大な政治権力が、「ヤマト王権」である。第I部では政治権力と遺跡の関わりについて考察し、ヤマト王権の支配構造に言及する。

第1章では、奈良盆地東南部の前方後円墳の分布を確認する。つづいて、「おおやまと」地域の遺跡である纏向遺跡と周辺の集落や古墳についてその動態を追った。「おおやまと」地域は、後に倭屯倉・屯田がおかれた奈良盆地中央部・東南部地域の両方を含めた呼称であり、ヤマト王権の権力基盤（原初的な屯倉という意味で、本論文では「ミヤケ」と呼称）である。そしてそこにあつた遺跡の動態から版図や権力構造などに言及した。さらに、奈良盆地中央部の集落遺跡である伴堂東遺跡の発掘調査成果からヤマト王権が、各地からの移住者や渡来人を受け入れ周辺の開発を押し進める過程を倭屯倉の成立過程に準えて論じた。

第2章では、ヤマト王権麾下の中小豪族である奈良盆地中央部の額田部と、ヤマト王権と拮抗する権力を保持したとされる奈良盆地西南部の雄族である葛城氏について、古墳、居住地、集落や渡来系集団などのありかたから、その支配構造について考察した。

第3章では、権力者の居住地と墳墓について、居住地（豪族居館）、古墳の墳形（帆立貝式古墳）、内部構造（横穴式石室）から、その階層性と構築の意義について考えた。

さらに、第4章では、渡来系集団の動向を朝鮮半島と主に奈良盆地の事例から考察した。まず盆地中央部・東南部・北部の渡来系遺物の出土する遺跡の動向からヤマト王権を直接支えた渡来系集団の役割と意義に言及した。さらに、奈良盆地における鍛冶集団の動向・出自などについて考察した。また、ミニチュア鉄製品と鍛冶集団について論じ、朝鮮半島と奈良盆地の事例を集成して、いずれの地域にあってもミニチュア鉄製品が鍛冶集団の存在を示す象徴的遺物であることを証明した。そして、両地域の鍛冶集団の階層性などに言及して、奈良盆地の渡来系集団の出自などにも言及した。これら論考を通じて、古墳時代の社会構造と政治的関係を明らかにして、古墳造営のメカニズムを解明することに努めた。

ヤマト王権の政治・社会と、古墳の造営が不可分の関係にあることは、紛れもない事実である。しかし、古墳にヤマト王権の身分秩序が反映されているとみる古くからの考えに加え、ヤマト王権が「前方後円墳体制」を確立させて各地にそれを波及させたとみたり、「前方後円墳国家」なる統一国家を形成したりしたとする議論は、本末転倒であって、筆者は是認できない。むしろ、各地の古墳を詳細に検討したとき、ヤマト王権との同盟や従属関係がそこにあらわれている場合もあると考えられるが、それが、墳形・規模などに一律的に規定されているとみることは不可能である。

ヤマト王権とそれぞれの古墳被葬者との関係は、まずは、古墳の規模・墳形のみならず立地、環境と外部施設、内部施設、副葬品などを含めて、総合的に検討すべきものである。そして、古墳被葬者の権力基盤を上記の遺跡学に照らし証明してから、判断されるべきである。それぞれの古墳被葬者は、ヤマト王権との関係のみならず、そのおかれた個別の環境にあつて、権力層相互の関係の中で、結果的に様々な古墳を築造したと理解されるのである。とりわけ、埴輪・木製立物には、被葬者の実力と個性が如実に表現されていて、これを手懸かりにすれば、個々の古墳被葬者のおかれた状況を明確に把握することができる。木製立物とは、古墳に埴輪と同様に外部施設として樹立された木製品の名称であり、土製品である埴輪と同様の意義をもつ。

筆者は、埴輪・木製立物が樹立された第一義的な目的は、個々の古墳被葬者の実力と個性を表示するためにあつたと考えている。埴輪は、奈良盆地東南部の大型前方後円墳被葬者の発案で、吉備地方で流行していた特殊器台を変形することによって創成されたものと理解しており、大型前方後円墳の被葬者が変わるごとに、新しい種類が加わったり新しい樹立方法が採られたりした。木製立物も埴輪と全く同様に、大型前方後円墳被葬者の発案により創成されたものである。その意味では、ヤマト王権により生成されたものであるが、王権内部にあつても、それが採用される場合と採用されない場合、量の多寡、採用された種類など様々であつて、そこに古墳の被葬者の実力と性格が反映している。地方の古墳にあつては、それがなお顕著であつて、埴輪や木製立物がそこに樹立されているからといって、すぐにそれがヤマト王権との強固な関係を示すとは限らない。

第Ⅱ部では、ヤマト王権と埴輪文化について考察し、埴輪の歴史的意義を究明することに努めた。第1章では円筒埴輪の成立と展開として、特殊器台から円筒埴輪に至る過程と、奈良県の円筒埴輪編年について考察した。第2章では埴輪文化の画期と変容として、埴輪生産と埴輪祭祀の画期について考察し、その地域色の背景や人物埴輪の出現について生産技術や思想の変容、渡来文化との関わりなどについて考察した。さらに第3章では埴輪・木製立物とヤマト王権として、木製立物の性格や意義について考え、埴輪・木製立物と王権の関わりについて考察した。

ところで、表題の「埴輪文化」は、筆者の造語である。1988年に、円筒埴輪・形象埴輪の研究を総合し、埴輪を総体として捉え、その意義を考究する研究を目指す目的で提唱したものである（「埴輪文化の特質とその意義」『橿原考古学研究所論集第八』吉川弘文館）。その時の課題のひとつは、古墳時代後期における近畿地方と関東地方の異なった様態とその歴史的背景を明らかにすることにあつた。本論文では、その考え方をそのまま受け継ぐものであり、用語もそのまま使用する。この時にやや欠如していたのは、その政治的・思想的な背景や、木製立物の樹立の間

題であり、本論文ではその点を含め、埴輪の性格や意義を具体的に追究することに努めた。

第Ⅰ部と第Ⅱ部で述べてきたような古墳とヤマト王権の関係の問題が象徴的に示されるのが、朝鮮半島西南部に分布する前方後円墳と埴輪の問題である。古墳時代中期～後期の当該地域とヤマト王権の関係を、古墳だけで推し量ることはできない。当時の国際環境からみて、ヤマト王権の支配領域に当該地域があったとか、同盟や従属の関係を結んでいた可能性は全く見いだせないのである。第Ⅱ部の第4章で、第Ⅰ部と第Ⅱ部を繋ぎ、それを総括する意味での詳細な検討をおこない、当該地における前方後円墳の被葬者の階層性や、両地域を盛んに往来した生産者集団の動向について言及して、それぞれの地域に古墳が造営され、埴輪が樹立された意義について考察をおこなった。

以上の論考を通じ、遺跡（遺構・遺物）から古墳時代にアプローチし、古墳を築造した権力者の権力基盤、支配構造などが個別具体的に証明され、その麾下にあった渡来系集団や生産者集団の様態も証明された。その結果、王権の強靱な意志のもとに古墳が築造され、そこに埴輪や木製立物が樹立されているわけではなく、脆弱な基盤しか持ち得なかった権力者相互の闘ぎ合いとそれぞれの個性の主張をそこによみとった。

最後の結語「遺跡学からみた古墳と埴輪文化」は、主に今後の展望と課題である。絶対年代の究明や遺跡保存などの問題があるが、今後も発掘調査や他分野との連携によって個々の古墳、集落、豪族居館などの実態を徐々に明らかにしていき、王権中枢や個別の古墳築造者の支配構造の実態を、より鮮明にすることこそ必要である。本論文はあくまでその第一歩である。